![C:\Users\NISHIYAMAYUKO\Desktop\book[1].png]()『ピンクとグレー』

角川書店　加藤シゲアキ

幼い頃は誰もが夢を抱いていて、けれどそれをそのまま達成できる人間は一握

りだろう。しかし妬んでも憎んでも、世間から見れば「勝ち組」なその一握り

だっていつどこでどう転ぶかなんてわからない。けれど傍目から「これだから

今時の若者は」と言って片付けられるものではないと思っている。アイドルグ

ループでデビューした著者のリアルか、創作か、皮肉か。芸能界を舞台にした

二人の青年の青春と友情の不器用な在り方に、共感しつつ切なくなった。

![C:\Users\NISHIYAMAYUKO\Desktop\51ZkwrEdzbL._SL500_AA300_[1].jpg]()

『海の都の物語』

塩野七生　(新潮社)

「海よ、お前と結婚する！」

ローマ帝国滅亡後、他国の侵略に耐えず晒されていたイタリア。

その中でヴェネツィアは1000年に渡る独立を守り続け、最盛期には「地中海

の女王」としてヨーロッパに君臨しました。

徹底したリアリズムに裏打ちされたその統治機構は、現代の私達にも多くの教

訓を与えてくれます。

ヴェネツィア一千年の興亡史。人と海が紡いだ物語。

![C:\Users\NISHIYAMAYUKO\Desktop\41pIIAHa6fL._SL500_AA300_[1].jpg]()

『セイジ』

光文社　辻内智貴

彼が何を思って物語の最後の行動を起こすかはわからない。国道沿いの寂れた

店の雇われ店長、セイジは旅人の「僕」を雇い入れる。セイジの言動には厭世

的なものを感じるが彼は誰よりこの世界を見つめていて、それでこそ一人の少

女を救おうとした行動に繋がるのだろう。店のオーナー翔子はセイジを「この

世では生きられない陸の魚」というが、生の尊さを誰より知っている人間がセ

イジなのではないかと読み終わると思った。

![C:\Users\NISHIYAMAYUKO\Desktop\01918294[1].jpg]()『哀愁の街に霧が降るのだ』

椎名誠　(三五館)

青春=キラキラというのは間違いである。

若者はもっと泥臭くあるべきである。

日も当たらぬアパートにて蠢く男4人(椎名、木村、沢野、イサオ)。

合成酒で二日酔いに呻き、サバ缶白菜鍋をつつき、河川敷でのバトルロイヤル。

溢れんばかりの不毛なエネルギー！

金がなくても、バカをやれる仲間がおれば、人生は面白いのだガハハ！

酒、貧乏、馬鹿騒ぎ、たまにホロリ。